



オルカ遭遇の最前線となる無人島、スリーキングスアイランドの風景



キラール・ホエールの異名を持ち、人々から憧れとともに、畏怖の念を持たれ、鯨類の中でも「危険な生物」という特別な存在としてみられているオルカ(シャチ)。人間が彼らと水中で接触した場合、どのような行動を取るのかは、未だに未知の部分が多い。しかし、「ニュージーランド最北端の海域で、このオルカとの水遭遇が可能らしい」という乏しい情報を元に、日本人ダイバーからは馴染みの薄い、南半球の島国へ飛んだ。



(上)これも2004年撮影の水中オルカ
(左)今年のクルーズで遭遇したマイルカの群れ

Encounter with Orcas オルカを求めて

ニュージーランド最北端、前人未到の海で、
オルカとの海中遭遇にチャレンジ





オルカを求めてNZ辺境の地へ

「透明度の高い海中で、オルカと遭遇できる」という情報を元に、ニュージーランド(以下NZ)へ飛んだ。時期は2005年のゴールデンウィーク。このオルカと泳ぐクルーズを企画したのは、オーストラリア人のビデオグラファー、ロブ・トレリ氏と西オーストラリアトラベル&ダイブセンターの高島雅之氏のコンビ。彼らとは今年2月、オーストラリアのメルボルン近海でのシロナガスクジラ水中撮影チャレンジ(WEB-LUE創刊号、「地球最大の生物、シロナガスクジラ衝撃遭遇体験記」参照→LINK)でも一緒だった。

危険と言われているホホジロザメやタイガーシャーク、簡単には見られない大物海洋生物、それらの貴重な生態シーンを撮影する事に情熱を燃やすロブの大胆不敵さ。そういう生物を一般の人に見てもらいた

という、また違った情熱を燃やす高島氏。このオルカとの水中遭遇チャレンジクルーズは、彼ら二人の、かなり無謀とも言える数々の企画ツアーの、ほんの一つに過ぎない。その多くが、なまはんかな気持ちで参加することはおすすめできない、ハードな内容だ。このオルカ・クルーズも、開催期間中、強風で海が荒れたせいもあるが、当初自分が予想していたよりもさらにハードな船上生活が続いた。はっきり言って、今までの海洋取材経験の中でも1、2を争う厳しさだった。

日本から飛行機で到着したNZ北島最大の都市、オークランドから、オルカ・ウォッチングのためにチャーターした船が出港するマンガヌイの港町までは車で約4時間。この国の人口よりも多いと言われる、羊たちが放牧されている牧歌的風景など眺めながら、ひたす

ら北上。到着した頃には日も暮れてしまっていた。ここから、目的地となるオルカが頻繁に姿を見せる海域までは、さらに約14~15時間を要するという。夜に出港して、早朝には前線基地となる、NZ最北端の島、スリーキングスアイランドに到着する予定だ。友人のNZ人ダイバーでさえ「まだ潜った事がない」という辺境の地でもある。来るまでに下調べをまったくして来なかった自分も悪いのだが、まさかそんなに時間がかかるとは思わなかった。

しかし、長旅に疲れた身体には朗報と言っているのだろうか。港から約5時間の海域で漁を行っていた漁船から、オルカ目撃の情報が入っていた。そのため、予定を変更し、初日の夜は港で停泊。早朝5時頃に出発して、10時か11時にはオルカを発見したポイントに向う事になった。

ポート乗船2日目、日の出前にエンジンがかかり、出港。東の空が茜色に染まり、山並がシルエットになって美しく連なっている。空には雲が広がり、決してベストコンディションとは言えない状況だ。マンガヌイの湾内では多少穏やかだった波も、外洋に出ると進行方向の北からの強風が、ポートを激しくバンピングさせた。体調もあまり良くなかったので、早々に酔い止

めを飲んでおくことにした。

このツアーに参加したのは、僕を含めて日本人8名、ハワイから来たプロカメラマンのダグ・ペリン氏。しばらくは、他のゲストたちと会話を交わしていたのだが、薬を飲んでいても関わらず気分が悪くなってきた。船にはそんなに弱い方ではないはずなのに。

午前11時頃、北島最北端東岸沖で複数のブロー(クジラ類の出す噴気)を発見。「こんなにあっさりオルカに会えるものなのか」と興奮をおさえながら、望遠カメラを持ってトップデッキに登る。船上のゲストの間に緊張が走る。オルカに会えるという期待と、これから水中で遭遇するという緊張感で、いつになく真剣になっている自分に気が付いた。船酔いの気持ち悪さは、いつの間にか忘れてしまっていた。

しかし、このブローはどうやらクロミンクジラのものだったようだ。確かに以前インドネシアのメナドでダイビングクルーズ乗船中、偶然にもオルカの群れを発見した時、最初に目に付いたのはブローではなく、あの特徴的な長い背びれだった。クロミンクは、しばらく船から少し離れた場所にいたが、いつの間にか姿を消していた。同時に船酔いの気持ち悪さが戻ってきた。



(左)プリンセスアイランドの岩礁の上には多くの海鳥が営巣していた。(右)今回、オルカクルーズに使用したポート。(上)強風で大きなうねりを作る外洋



海中には、水面で確認できる10倍はいるのではと思うくらいのマイルカたちが、僕たちの様子伺っていた



船について、元気良くジャンプするマイルカ

様々な 鯨類に遭遇

13時45分、同海域で「イルカ発見！」船上スピーカーからキャプテンの声が響き、また気持ち悪さを吹き飛ばした。「今度こそ」と皆騒然となり、撮影とエントリーの準備を始める。しかし、「フィンの形が違う」。どうやらまた違う鯨類のようだ。海中の表面近くに小魚の群れが上がってきていて、海鳥や大型の魚たちとともに激しく捕食活動を行っていたのは、無数のマイルカとコビレゴンドウだった。しばらくはその激しい捕食シーンを船上から撮影していたが、種類こそ違うものの、この2種類も普通の場合ではなかなか水中で遭遇するチャンスが無い生物。ロブと僕がそれぞれガイド役となって、ゲスト8人が、4人ずつの2チームに別れてエントリーして水中での撮影を行う事になった。

初めての海、しかも外洋で初めて水中で遭遇する海洋生物。イルカに比べればその緊張感はいささか少ないものの、それでも毎回初体験というのはドキドキす

るものだ。キャプテンがエンジンをニュートラルに入れた合図とともに5人でバックデッキからエントリーする。

水中でのマイルカの数、海面で見えていた10倍はいるのではないかとこのくらい群れていた。キーキーという彼らの鳴き声が止めどなく海中に響き渡り、海底からはポコポコとイルカたちが出すエアのバブルが、あちこちからわき上がっていた。「まるでイルカの絨毯みたいだ」。距離がありすぎて撮影には及ばないのだが、エントリー直後、真下に見えるマイルカの多さは、まさにそんな感じだった。「多すぎる、それにするさい！」。

海中が暗く、イルカたちの姿はぼんやり見えるのだが、なかなか撮影可能な距離まで寄ってきてはくれない。しかし、彼らがこちらに興味を持っているような泳ぎ方をしているのはわかった。僕は皆から少し距離

を置いて、ほとんど動かないようにしてブカブカと水面に浮いていた。すると、数頭のイルカたちが興味を示して、体色の黄色い部分もはっきりわかるくらい、かなり近くまで接近してきてくれた。2回エントリーし、2回とも36枚撮りのフィルムをほとんど撮りきる事ができたが、他のゲストはあまり撮影できなかったと言っていた。

結局、この海域での搜索はこれで諦めて、前線基地となるスリーキングスアイランドへと向った。同島には翌、夜中の1時に到着。最終目的地のキングバンクへは、ここからさらに2時間。朝5時にその海域に向けて移動する事になった。

3日目、6時過ぎに目が覚めると、スリーキングスアイランドはすでに後方に小さくなっていった。2日目の朝感じていた頭痛は無くなっていったが、他にまだ数人、船酔いが続いている人がいた。



イルカから思われた鯨類は、背びれの形からコビレゴンドウと確認された



(下)黙々と船上での仕事を続けるマオリ族の血が混じった漁師たち (左)漁船に船を接近させて、オルカの状況を伺う (左下)ブルーノーズグループ漁を行う地元の漁船



船上からではあるが、はっきりとオルカと認識できる距離まで近づく事ができた

いよいよ オルカに会える！？

船が突然方向を変えた。キングバンクの北西で、漁船から、オルカが漁をする船の周りを回遊しているという無線が入ったのだ。オルカがこの近海に姿を見せるのは、1月頃から6月頃まで行われるブルーノーズグループという深海性のハタ科のトロリング漁の時期。トロリングで掛かったブルーノーズを網から失敬しているのだという。だから、漁船が漁をしている周囲に出没することが多く、外洋を探索するにしても、彼ら漁師からの無線が、かなり有力な情報源になる。

1992年から1997年に行われたNZにおけるオルカの個体識別調査(Ingrid Visser PHD research project)では、117のオルカの個体が撮影され、65~167個体が

近海に生息していると推定された。65%のポッド(群れ)が11頭か、それより少ない数で行動をともにしている。平均のポッドサイズは4.5頭で、最大は22頭という調査報告がなされている。

海上に赤くぼろい漁船が見えて来た。うねりはあるものの、途中から海上は凪ぎになっていた。船上では、NZの原住民マオリ族の血を引く二人の若い漁師が、深海に落とすはえ縄を黙々と引き上げているところだった。しかし、オルカの姿は見えない。船を接近させて、2人に聞くと、一時も手を休めたくないという感じで、面倒くさそうに船尾の方を指差した。水揚げを横取りするオルカ同様、そのオルカと泳ごうとしている我々は、漁の邪魔者でしか無いのだろうと感じた。指

された方向に移動してすぐにオルカの背びれを発見した。個体数はオスの他、4~5頭。平均的なポッドの大きさのようだった。かなり小さなヒレも見えたので、子供も一緒かもしれない。

最初にエントリーする4人と、ガイド役のロブがバックデッキにウエットスーツを着込み、フィンとマスクをして、手には水中カメラを持ち、いつでもエントリーできる態勢で合図を待つ。船は少しずつオルカに接近を試みる。僕は、その間に船上からほんの数カットだが、オルカを撮影した。しかし、ある程度まで接近すると彼らの姿が見えなくなってしまった。子供がいたから警戒したのだろうか？それとも漁が終わって、ここにいる必要が無くなったのだろうか？

とにかく、最初のアプローチは失敗に終わったが、この海域にオルカが生息していることは自分の目で確認することができた。しばらくは、周辺海域を探したが、結局見つからないので、巨大なフィッシュボールで捕食中のバンドウイルカとオキゴンドウの大きな群れに入水し撮影を行った。そばとピザという日本人のゲストのための妙な組み合わせのランチを食べた後、再びオルカを捜索。午後2時頃、再度オルカの背びれを発見し、入水を試みる。しかし、今回はかなり追走できたのだが、結局海中に入るタイミングまでは至らなかった。また、バンドウとオキゴンドウの群れのところに戻り、水中での撮影を行った。



NZの固有種の魚も見ることができる



(左)無人島近くでは、巨大なロブスター、アワビ、ウニなどが食べ放題だった (右)海のコンディションを伺うクルー



(上)無地島でのダイビング。海草の上には、バタフライパーチが群れていた (下)集団でフィッシュボールでの捕食をくり返す、バンドウイルカとオキゴンドウの群れ (下左)水中で撮影することができたバンドウイルカ (下右)水面に顔を出して、船上の僕たちの様子を伺うオキゴンドウ



空しく時間は過ぎて行く

この日はコンディションが良いので、この大海原のど真ん中で一夜を過ごし、早朝からオルカを探す事になった。周囲にはイルカたちが泳ぎ回っているのだが、皆すでに気にならなくなっていた。

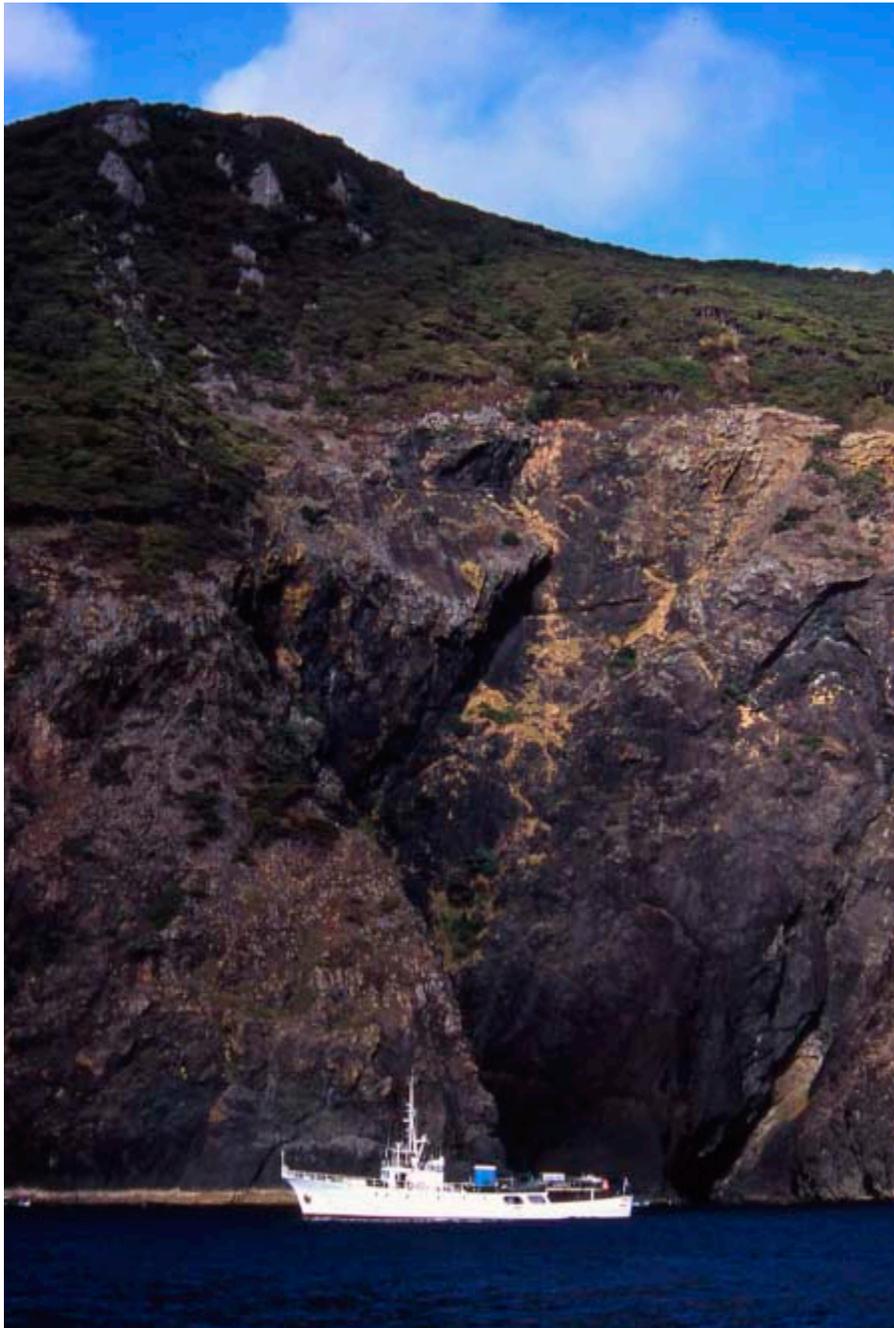
4日目、穏やかだというので外洋で船をドリフトしながら寝ていたのだが、船は巨大なうねりでかなり揺れていたために、あまり熟睡はできなかった。午前中にマンボウを発見。波間にゆらゆらとマンボウの背びれが浮いているのを船上から確認し、エントリーするが、水中での目撃は果たせなかった。その後、またバンドウとオキゴンドウの群れに遭遇し、何度か入水。本来なら数百頭はいるイルカたちの群れに毎日遭遇して海中で泳いで撮影しているという、鯨類好きにはたまらなく幸せな状況にいるのだが、オルカが目的のために、皆いまいち感動が薄い。

11時30分、また漁師の船から「オルカ発見」の無線が入ってきた。ここから 2マイルの距離だという。漁船が知らせてくれた海域に向かうと数個のブローが見えて来た。どうやらオルカでは無いようだ。またクロミンククジラだろうか。「ミンキーでも入れれば入るよね」と他のゲストと話していた。しかし、ミンキーで

も無いらしい。と、彼らの1頭がスパイホップをしてこちらの様子を伺ったのだ。「マッコウだ!」。どうやら、僕らの船はマッコウの群れに取り囲まれていたらしい。周囲でスパイホップやブリーチングをする姿も見ることができた。船尾の目の前で1頭がスパイホップしたので、エントリーしてみたが、姿を見るには至らなかった。

その後、キングバンクにオルカが見つからないので、もう一つの漁場になっているミドルセックスバンクに向かう。途中でまたブローを発見。またマッコウかと思ったのだが、クジラに詳しいゲストの話では、どうやらイワシクジラという事だった。

ミドルセックスバンクに着いた頃には風も波もかなり強くなって来た。しばらくオルカを探すが、この状況では入水は難しいと判断。スリーキングスアイランドまで戻る事になった。5日目、6日目は強風と高波でオルカ捜索は諦めて、島周辺でダイビングを楽しんだ。NZの固有種や変わった海中環境などを楽しんだ。しかし、悪天候のためとはいえ、心のどこかにオルカを探しに行けない不満、空しく過ぎる時間への焦りが募っていくのを感じていた。



強風を避けるには絶好の高い絶壁を持つスリーキングバンク



(上左)穏やかな風景が広がる、マンガヌイの港町 (上右) 2004年、同じ海域でのオルカとの遭遇シーン (下右)多くの大物生物遭遇などのコーディネートを行っている高島氏(右/撮影:小林龍矢さん)



高島 雅之さんプロフィール

西オーストラリアの海を中心に、現在はトンガのザトウクジラ、メルボルンのシロナガスクジラ、ニュージーランドのシャチとの水中遭遇ツアーなど、世界中にフィールドを広げてダイブコーディネートを行う。見かけからは想像もつかない命知らず&海への情熱に燃えている。ハマる人と、嫌悪感を感じる人と、おそらく両極端なのではと思われる高島氏の奇妙なキャラクター。僕はその奇妙なキャラクター、そして想像を絶する海への情熱に見事にハマった一人でもある。

http://diveadventures.watravelanddive.com/japanese/diverguide_1.html



ラストチャンス

7日目、オルカ搜索のラストチャンス。スリーキングスアイランドで同じように波風を避けていた漁船が、「キングバンクに行き、漁をしてオルカを見せてやる」と連絡してきたので、朝5時30分にスタートしてキングバンクへ。この2日間程では無いが、やはりまだ波は高い。すでにバンクに到着していた漁船に接近すると、突然我々のボートの目の前にオルカが飛び出してきた。はっきり全身を見る事ができたが、撮影する暇もなかった。しかし、その姿を見れたのは、ほんの数人のゲストだけだった。その後も周囲を探したが、それ以降まったく姿を見せてくれなかった。漁船も、この波では網をおろすのは困難ということで、NZ本島まで引き返すという無線が入った。無念ではあったが、こちらも戻る事に。

この日は7時間かけてNZ北島最北端、ノースケープ(北岬)まで戻り停泊。翌8日、初日に搜索したエリアを搜索しながらマンガヌイの港に戻った。

結局、オルカとの水中遭遇は果たせなかったが、今回のクルーズで、クロミンククジラ、マイルカ、コピレゴンドウ、バンドウイルカ、オキゴンドウ、マッコウク

ジラ、イワシクジラ、そしてオルカと8種類もの鯨類を船上から、あるいは水中で目撃することができたのには驚いた。「オルカクルーズとするよりは、多種鯨類遭遇クルーズ」にした方が良いのではと皆で冗談で話していた。

2004年の同じ時期には、ロブはこの海域でオルカのポッドとの水中遭遇を果たしている。その時の映像を見せてもらったが、水面はベタ凧状態だった。とにかく、天候次第、それはどんな海洋生物を追うにしても同じ事だ。やはりコンディションに恵まれなかった事が今回の敗因かもしれない。僕たちのクルーズの翌週に行われたクルーズでは、ほんの数分だったがオルカとの水中遭遇を果たしたという報告が、日本に帰国した僕らの元に入ってきた。

来年の同じ時期、彼らは再びこのオルカクルーズを開催する。僕も「来年こそ是非水中でオルカの写真を撮影してください」と誘われているので、是非とも再チャレンジをしたいと思っている。